

平成 30 年度 第 3 回観察会 記録

日 時	平成 30 年 6 月 12 日 (火) ~15 日 (金)	3 日間とも快晴でさわやかな気候
観察地	岡山県備前市日生、閑谷学校、ふるさと村、伊部 (備前焼)	
講 師	コーディネーター田中 克先生 現地講師は本文中に記載	
テー マ	瀬戸内海の里海づくりを学ぶ	
備 考	参加者人数 28 名 (田中先生、スタッフ 3 名含む)	記録 飯田正恒

1 日目 : 6 月 12 日 (火)

1. 日生漁業協同組合事務所にてレクチャー

(1) 歓迎挨拶 : 船橋美可 備前市環境協会事務局長

備前市は海に面し、市面積の 80% が山 (森)。自然環境を生かした観光資源に恵まれ、年間 100 万人の観光客があり、冬場のカキ目当ての客は 50 万人に上る。日本遺産「備前焼」、「閑谷学校」もあり、大いに学び楽しんで下さい。

(2) 日生漁業組合の概要 : 天倉辰己専務理事

1) 組合員数 (正 79 名、准 72 名)、主要漁種は、漁船漁業 = 壺網、小型底引き網、流し網。養殖漁業の中心はカキとノリ。日生カキ生産量は S31 年 12 経営体、筏数 24 台であったが、H30 年には 50 経営体で筏は 500 台まで増えた。

2) カキ養殖の概要

日生漁港の最大収入源。筏垂下式で、場所は毎年くじ引きで決め、収穫は 4 月まで。海底に落ちたカキは底引き網漁者が回収し、収入にしている。海の清掃にもなり一石二鳥。

3) アマモ場再生の取り組み

アマモ場は稚魚が育つ海のゆりかごで、光合成する貴重な植物群。30 数年前にアマモ場が消滅し同時に不漁が進んだことに危機感を持ち、その再生に取り組んだ。

① アマモのライフサイクルや底質調査、沈床海堤設置、

種子散布などを粘り強く実施した結果、平成 25 年頃から回復がすすむ。

② 新たな問題となった流れ藻の増大に対し、日生中学

生が回収作業に協力 (右写真) してくれるようにになった。生徒の漁師への聞き書きにより文章表現力が向上し、勉学意欲や学力が向上する効果も現れてきている。

③ 平成 21 年度から活動組織として「日生藻場造成推進協議会」を結成、現在会員 83 名。

④ 平成 21 年度から環境生態系保全活動支援事業、平成 25 年から水産多面的機能発揮事業に取り組んでいる。

⑤ 30 以上の年月をかけて地道にアマモ場再生に取り組んできたが、近年その成果が見えるようになって来た。

⑥ 活動を継続するためにも漁業者が中心になり次世代へつなぐことが大切で、持続可能な里海づくりを進めている。



左船橋さん、右天倉さん



(3) 里海づくりの動向：広島大学名誉教授 松田 治先生

平成28年11月に自然学講座で「日本発里海(satoumi)を世界に広げる」という演題でお話をさせていただいた。今日は里海づくりの国内での動きを紹介する。

- 1) 「里海」という言葉ができたのは比較的新しく、今年が20周年。当時九州大学におられた柳先生がこの概念を提唱された。人が海と密接に関わり合いながら豊かな海づくりを目指す里海の考え方と実践は国内外で着実な広がりを見せている。
- 2) カキは水質浄化の機能が大きく、エサをやらなくても自然のサイクルのなかで成長し収穫できるので、自然の循環を高める効果がある。ブリやハマチのように多くのエサが必要な養殖とは異なる。
- 3) 私が住む広島は、広島湾でのカキ養殖が盛んな所で、カキ筏（1台10m×20m）が1万台以上、面積にすると200ヘクタールもあるので、カキは大きな収入源であると同時に、海をきれいにしてくれる大切な生物。
- 4) 昔はどこでもアマモを有機肥料として使っていた。しかし安価な化学肥料に押され、使用されなくなった。いまアマモの有用性が認識されるようになりその復活をめざしている。日生中学生もアマモを復活する活動に積極的に参加してくれている。以前には赤穂御崎小学校の生徒たちが苗を水槽でつくり、海に植えることを始めたのが始まりで、この子達はいまでは社会人になっている。
- 5) 里海づくりの事例
 - ① 香川県

全域が瀬戸内海の流域であることや、県土がコンパクトで人の暮らしと海が近いという特徴を生かして、県下全域を対象とした里海づくりを県民や関係者と連携・協働しながら海ごみの除去、エコツアー、シンポジウムなどを行い普及に努めている。
 - ② 三重県志摩市

英虞湾の湾奥部に点在していた干潟（269ha）が、江戸時代以降の水田造成などにより約70%（185ha）が消失し、赤潮や貧酸素水塊が発生するようになった。消失した干潟のうち現在は使われていない遊休地に海水を入れ、堤防により分断されていた陸と海のつながりを取り戻すことにより、多くの生きものが生息できる干潟を再生し、生物多様性を回復・創出する取組が進んでいる。
- 6) 八幡さんや田中克先生の海遍路に同行して思ったことは、ペリカンが飛び交い、ジンベイザメが泳ぐ海を守ることの大切さ、また防災面でも自然の生態系を大切にすることの重要性を改めて認識した。昔は海の環境保全というと水質をきれいにするとか、海のことだけを考えてきた経緯がある。里海は人との関わりが大切であることを訴えた、NHKのディレクターが著した「里海資本論」（角川新書）は読物としても面白いのでお読みになることをお勧めする。
- 7) 里海を支援・推進する国レベルの制度について、里海が国際的に注目される理由、里海づくりの日本国内の動向の総括についても解説いただいた。内容省略。

2. 加子浦歴史文化館・・・案内 西崎学芸員

「加子浦」とは公用船や海路を行く参勤交代の諸大名の通い船へ水や薪を供給したり、加子役（船を漕ぐ人）をつとめる労役を課された港のこと。館名は日生村が江戸時代に加子浦に指定された歴史に因むとのこと。建物は日生町の資産家吉田家の家屋を移築、再現し、平成9年にミュージアムとしてオープンした素晴らしいもの。木造資料館には、書院の間などが当時のまま保存され、また北前船、機帆船など精巧な模型や船舶用具、船大工道具などが展示され、往時の隆盛ぶりがしのばれた。



昔の土蔵をイメージした文芸館には日生で生まれ育った児童文学者の牧野大誓、小説家の里村欣三、画家の久保田耕民の作品や遺品を展示するほか、日生を訪れた与謝野晶子・鉄幹等を紹介している。

3. 流れ藻回収

午後、日生町漁業協同組合の漁師が操作する船に乗り、日生中学校の生徒（2年生60名）とともに、日生近隣の流れ藻を回収する体験をした。筏などに絡まっているアマモの流れ藻を日生中学生と回収し、集めた種付きのアマモは袋に詰め込み海中で寝かし、のちに種を分別すること。その種を海にまき、アマモ場の維持と拡大をはかっているという。

- (1) 服を着替え漁業協同組合前に集合。
- (2) 日生中学生60人到着、組合長の訓示を受ける。
- (3) 全員安全胴着を付けて乗船、私たちも1船2名ずつに別れて乗船。
- (4) 船は沖合にて、流れ藻の多い筏を見つけ近寄る。流れ藻を竿で引き寄せ船に引き上げる。
- (5) 種子のついているものとそうでないものをより分け、種子つきは網袋に入れ、筏まで運び海中にて種子の取り出し適期まで寝かせる。今回の作業はここまで。
- (6) サワラ稚魚育成中の筏を見学。5センチほどに育つと放流。成魚になり漁獲されるのは約5割のこと。



日生中学生たちは今年すでに何回かこの作業に参加し、慣れた手つきで作業をこなしていた。

漁師への聞き書きで表現能力が向上したと組合長の説明があったが、単なる作業応援ではなく、日生に生まれ、日生で育つ幸せを感じながら流れ藻回収大作戦に参加しているようで、頼もしさを感じた2時間であった。

4. 日生港から頭島へ

定期便「ノリナハーレ」（19トン）で日生港を16:40分に出港。お客様達28名のほかには一般のお客様2名。そのうちの1人の婦人が、たまたま私の隣に座られたので話かけてみると、自宅は最初に寄港する鴻島にあり、日生に所用があり出かけた帰りとのこと。鴻島は景色はよいし空気もきれいだし、自然環境はよいのだが、生活するには数々の不便があり、それに耐える人でなければ住めないと。ことに急病になると大変で、救急車に相当する医療船が駆け付けてくれるが、陸上のように短時間には来てくれず、ハラハラすることもあると。人口は減るばかりで現在20所帯42人、その反面、外国人居住者が目立つようになった。中国人が多いという。主な産業はミカン栽培。話すうち、鴻島の港に着いたので下船され、健康を祈りお別れした。



この便には備前観光協会ガイド西林さん（右写真）が乗船、島々のエピソードを説明していただいた。

① 大多府島の「元禄防波堤」

元禄11年（1698）岡山藩によって港が建設され、諸藩の参勤交代の寄港地として賑わった大多府漁港に残る元禄防波堤は、現存する数少ない明治以前の港湾施設で、300年以上経過した今もなお現役で活躍している。防波堤は、岡山藩の土木技術者・津田永忠の指揮で石工河内屋治兵衛が造った。



二段石組に加え頂部は優美なかまぼこ型で、閑谷学校の石壙と同様に頑丈で美しい外観。登録有形文化

財（建造物）に指定されている。

② 長島

長島は備前市ではなく、瀬戸市域であるが、頭島からは目前に見える位置にあり、ハンセン氏病の国立療養所「長島愛生園」がある島として知られる。病気への偏見からいわれなき差別を受けた人々の苦労を偲びながら、島を遠望した。

③ 鹿久居島・頭島と本土を結ぶ橋

かつては船で行き來した両島も、2004年11月に鹿久居島と頭島が頭島大橋（300m）でつながり、次いで2015年4月日生と鹿久居島が全長765mの備前日生大橋（ハートマーク付きの名称は公募で決まった。右写真）でつながって離島ではなくなり、両島住民の積年の念願が叶った。長い間、通勤・通学・通院に、海が荒れると定期船が欠航して大きな影響を受けた。頭島の住民が昭和62年から架橋預金『月500円』を始め、国がその熱意を認め、離島振興法に基づき、生活道路として平成6年に採択が決まったとのこと。



一方、備前日生大橋開通後の日生諸島の公共交通機関をどうするか検討の結果、市が19tの船「ノリナハーレ」を新造し大生汽船に無償で貸与し、支援することになったとのこと。鴻島、大多府島、鶴島の人々にとって、ノリナハーレがいのちの綱になっている。

（頭島 民宿よしのや 泊）

2日目：6月13日

1. 日本遺産「閑谷学校」で教育の精神を学ぶ

岡山県青少年教育センター閑谷学校にて、センター長であり、（公財）特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会事務局長・徳光康弘氏（右写真）が講演された。



（1）『奇跡の学校 旧閑谷学校と論語～閑谷学校7つの謎～』

- ① 日本最古の謎・・なぜ、閑谷学校が日本最古の学校なのか
- ② 庶民の学校の謎・・庶民のために学校まで作って、学ばせたかったのは、なぜか？
- ③ 人里離れた地の謎・・通学にも管理にも不便な辺鄙な山の中になぜ？
- ④ 堅牢壮麗な建造物群の謎・・地方の藩の庶民の学校が幕府の昌平黌に匹敵する？
- ⑤ 国宝講堂の謎・・特別に豪華でない、一見シンプルな講堂の秘密とは？
- ⑥ 学校の維持、継続の謎・・厳しい藩財政の中でも幕末まで維持できたのはなぜ？
- ⑦ 近世の学校が現代まで継続した謎・・近世から近代～現代に通じる教育とは？

以上の問いかけに答える形式で閑谷学校の建学理念、歴史、カリキュラム、財政基盤、永続性を持たせる工夫などを説明された。

（2）国宝の講堂で論語を読む

靴下を一枚多く履き、漆塗り床を傷付けない配慮をして講堂に入る。

配布された「あいうえお論語」の“「な」の項、”女、君子の儒と為れ、小人の儒と為る無れ。”など4章を徳光氏に続き朗読した。

私達に続き、地元の小学生が講堂で論語の指導を受けるのを見て、国宝の講堂が若い世代を育てる施設として300年以上たった今も現役で使われていることに驚くと共に感動を覚えたことであった。



(3) 文化財見学

論語朗読のあと、校内の建造物を徳光氏の案内で見学した。講堂など、建造物は火災や雨から長持ちさせるための工夫が随所になされており、講堂は建築以来300年以上経過した現在まで一度も修理することはなかったという。池田永忠の学校存続への強い思いが高い建築技術でもって存分に生かされていることがよくわかった。

○国宝：講堂 1棟、 ○重要文化財：小斎・飲室・文庫・聖廟・閑谷神社・石壙など24棟
○聖廟前のカイノキ（楷木）の大木は見事な樹形で、秋の黄葉、紅葉はことに美しいという。

(4) 日本遺産

平成27年度、日本遺産初年度の認定として「近世日本の教育遺産群－学ぶ心・礼節の本源－」として「足利学校（栃木県）」、「咸宜園（大分県日田市）」、「弘道館（茨城県水戸市）」とともに選ばれた。

（岡山県青少年教育センター閑谷学校にて昼食をとり、バスで備前市漁協に移動。着替え後、再びバスで鹿久居島・米子湾に向かう。）

2. 米子湾でカヤック体験

鹿久居島の米子湾は、かつてアマモが繁茂する好漁場であったが、一時は高度成長期のあおりを受け、硫化水素のヘドロの海底になっていたという。

「アマモの生育は無理だ」というのが水産試験場の判断であったが、底質を改善すればアマモ場は復活するとの信念から、1990年からカキ殻、海砂、鉄鋼スラグ、ゼオライトなど様々な材料を使って調査を続け、カキ殻が最も有効であることを突き止め、1997年には6.8haのアマモ場を取り戻した。（NPO法人里海づくり研究会議 田中丈裕氏）。



その米子湾でカヤック体験をした。2人乗り、1人乗り、シースルーカヤックが待機。安全胴着を着け、指導員の説明を聞きカヤックに乗船、思いおもいに漕ぎだした。カヤックを操るのは初めてで、なかなかまっすぐに進まず苦労している人、スイスイと進む人とさまざまであったが、皆それなりに楽しい体験ができ、満足の様子であった。

（漁協にもどり着替えて、バスで八塔寺ふるさと村へ）

3. 八塔寺ふるさと村散策：

八塔寺ふるさと村運営協議会会長 松山正明氏の案内で散策。



- (1) 吉備高原の東端に開ける八塔寺村は、今から約1200年前に弓削道鏡が開基した八塔寺を中心を開けたといわれ、高野山のように山岳仏教が栄え、盛時には72もの僧坊があったという。
- (2) 現在の人の住む家屋数は9軒。近年まで郵便局や小学校があったが、現在はない。
- (3) 寺院

① 照鏡山八塔寺：

神龜5年弓削道鏡が開基したと伝えられる天台宗寺院で、かつては三重の塔もあった華麗な伽藍を誇った寺院であったが、現在住職無住で檀家は三軒とのこと。この現状は他人事ではなく、山村での寺院経営の厳しさを改めて認識した。（わが実家の菩提寺も同じ運命をたどるのであろうか）

② 恵日山高顕寺 :

神龜5年開基と伝わる真言宗寺院。毎年1月15日境内前の広場の大護摩供養は有名で火渡りの荒行も行われること。数十軒の檀家があることで、本堂や庫裏の手入れは行き届いていた。

(4) 八塔寺ふるさと村指定第一号

岡山県は昭和五十年にふるさと村第一号に指定。当初交付金の支給があったが現在はない。村の維持管理は住民の努力にゆだねられ、資金面で厳しい現状にあること。かつて映画「黒い雨」、テレビドラマ「ハツ墓村」、「火垂るの墓」のロケ地になったり、村はどこも手入れがよく行き届き、そのせいか海外からの観光客、特にフランス人が多いとのこと。この村ならではの特徴を生かし、行政とともに村を元気にする方策を見出し、賑わいを取り戻してほしいと願う。

4. 夕食・交流会：八塔寺ふるさと館にて

備前市里海・里山係 橋本 誠二さん、同出射 詩都（いでい しづ）さん、備前観光協会・船橋美可さん、備前市観光ボランティアガイド協会 梶原延孝（すぎはら のぶたか）さん達に我々自然学講座一行が加わり、にぎやかな交流会となった。

5. 蛍と星を鑑賞

交流会後、バスで三国地区へ行き、久しぶりに童心に帰り、美しい螢の乱舞と満天の星を楽しんだ。この後宿舎（八塔寺ふるさと村国際交流ヴィラ、八塔寺山荘、望が丘キャンプ場に分宿）に帰り、宿泊。

3日目：6月14日（木）

1. 備前市埋蔵文化財管理センター（右写真）で備前焼を学習

当施設の2Fに、備前焼の歴史、備前焼の製法、時代ごとの作品の特徴を説明した展示がされ、赤井学芸員に説明していただいた。



- (1) 備前焼は、古墳時代に朝鮮から伝わった須恵器が発展したものといわれている。須恵器は土師器に比べると、堅ろうで割れにくいので、平安時代末期には庶民の日用品として人気を集めていた。
- (2) この須恵器が、各地で備前焼、越前焼、信楽焼、瀬戸焼、丹波焼、常滑焼などに発展し、備前市伊部地方で発展した須恵器は、鎌倉時代中期に備前焼として完成された。16世紀後半になると北大窯、西大窯、南大窯など、大型の協同窯が築造されて大量生産体制が整い、全国に備前焼が普及していった。
- (3) 備前焼はその強靭さから日常雑器として壺、すり鉢、瓶などが盛んにつくられた。備前焼の魅力は飾り気のない素朴さであり、釉薬を用いない渋い焼き上がりは、やがて堺、京都の茶人に認められるとことなり、桃山時代には茶器の名品が数多く焼かれ、その名声を高めていった。
- (4) 昭和に入り芸術性を高めた作品が人気をあつめ、人間国宝に認定される作家を輩出し、備前焼の人気は不動のものとなった。
- (5) 2017年、備前焼は越前焼、瀬戸焼、常滑焼、信楽焼、丹波立杭焼とともに、日本六古窯として日本遺産認定された。現在、備前焼の窯数は約250窯、作家陶工合わせて350人といわれる。

この日、陶芸家平川 忠氏が来館され、氏の備前焼にかける想いを語っていただいた。その中で印象深かったお話。

「南北朝末から室町初頭に創業されていた古窯をモデルに土窯を築き焼成試験の結果から自然界にある台地の土を用いて築いた窯は土そのものの特徴を持った熱を放射するという、人間が加工した材料からは出せない理想的な熱で焼きものを産み出す窯である事が分かった。」

また土ひねりは、最近は電動ろくろがよく使用されるが、縄文・弥生時代の土器はひも造りであった。私もこの手法で甕をつくってみた。

ひもの継ぎ目は指で押さえて隙間をつないでいく。この方法を赤井学芸員は「備前継ぎ技法」と名付けてくれた。このように原点に立ち帰り作品作りをしたいと思っている。」



(昼食後 2グループに分かれ ①「備前焼」を体験 ②備前焼の里“伊部”のまちなみ散策)

2. 「備前焼」を体験：陶芸家 松岡 誠悟氏

備前焼陶芸家・松岡誠悟氏の窯を訪問、氏の備前焼への思いを聞き、玉づくりによる土ひねりの手ほどきをしていただいた。

松岡氏は、有明海の干潟土を使い、釉薬をつくることに挑戦、柳川のさいふや旅館の庭に窯を設けたことから田中克先生との交友がはじまり、今回の松岡窯訪問になったとのこと。(写真左 松岡氏。後方に窯)



氏は非常に才能豊かな方で、職業訓練校で「窯業」を教えるには国家資格「窯業製造家」の資格を取得する必要がある。陶芸作家がこの資格を取るには通常20年くらい必要なところ、氏は10倍の速度で勉強し一度の受験で資格を取得、岡山県でただ1人の有資格者とのこと。また陶芸は化学の領域にあり、例えば、備前焼の火襷（ひだすき）という赤い文様をつくるのは藁を捲いて焼くが、藁を使わなくとも、カリウムを塗って焼けば火襷ができると。薪になぜ赤松を使用するのか。このようなお話を楽しく聞いているうちに土ひねりも終わり、松岡窯にお別れした。

3. 備前焼の里“伊部”の町並み散策

案内 備前市観光ボランティア協会 三上さん (右写真)

(1) コースと説明概要

① 伊部駅陸橋から南大窯跡を遠望

① 駅前公園（小学生が書いたタイル絵や・土管の埠など面白い工夫あり）



左：小学生の作品・タイル絵

右：土管再利用の埠

② 天津神社（備前焼の狛犬、参道に陶芸家集団が製作したいろいろな意匠のタイル、金色に輝く丸瓦、北大窯跡）⇒ 窯元軒先に積み上げられた赤松の薪（太い、細いの2種あり）

③ 窯元で製造工程見学：原料粘土を砕く ⇒ 水ひ（砕いた粘土を水槽に入れ、異物を取り除く。粒子の大きさを分ける）⇒ 粘土乾燥（土練り機にかけ、室で熟成）⇒ 松割木 ⇒ 成型 ⇒ 窯詰め ⇒ 窯焚き（窯温度約1200℃で約1週間）⇒ 窯出し（10日ほど冷やした後）

(3) 作品の見方

- ① 胡麻（ごま）：胡麻のような粒がついているのが特徴。焼成中に松割木の灰が火勢によりふきつけられ、その灰が高い熱により釉化（ガラス化）してできる。灰が多く降りかかり、溶けてバナーのようになったものや、灰が溶けて垂れ流れているものは玉垂れや流れ胡麻と呼ばれる。色は、白や黄、青などさまざま。
- ② 桟切り（さんぎり）：黒色から灰青色などの色の変化が模様になったもの。燃料が燃え尽きてできた灰に作品の一部が覆われ、空気の流通が悪くぶし焼きになった部分に色の変化が現れる。炎があたる部分は、赤褐色、灰で覆われた部分は黒く、その境目は灰青色になるのが一般的。昔は、窯の内部を桟で仕切っており、この桟の下で焼かれる作品にこの模様が現れたので桟切（さんぎり）と呼ばれた。
- ③ 火櫻（ひだすき）：うす茶色の素地に、赤、茶、朱色などの線が「たすき」のようにかかった模様。素地に藁を巻いて、作品を「サヤ（陶器を焼くための容器）」に入れて焼くと、炎や灰が直接あたらないため、作品全体は素地に近いうす茶色に焼け、藁があたった箇所は、緋色に発色する。火櫻の模様は、藁のカリウムなどの成分と、素地の鉄分などの化学作用によるもので、本来は、作品を重ねて窯詰めをする際に、作品同士がくっつかないようにするために藁を巻いていたが、これが模様として用いられるようになった。



胡麻（ごま）



桟切り（さんぎり）



火櫻（ひだすき）

おわりに

3日間とも、これ以上にないという爽やかなお天気に恵まれ、すべての行程を遅滞なく参加者全員大きな感動を抱き帰阪しました。この観察会実施にあたり、備前市産業部農政水産課 里海・里山係 橋本誠二様、出射詩都様には最初の企画から終了まで、終始献身的にお世話をいただきました。心から感謝申し上げます。合わせて今回の観察旅行でお世話をされたすべての方がたに、同様に感謝申し上げます。

今回の観察会は、一昨年に松田治先生に教えていただいた「里海」を現地で体験し、またそこで頑張つておられる人々との交友が主な目的でした。日生中学生のアマモ回収大作戦に参加させていただき、少年たちが頑張っている姿を見て、里海づくりが次の世代に引き継がれる体制が着々とすすんでいることを実感し、彼らもまた期待にそぐわぬよう頑張ってくれる印象を強く持ちました。日生中学の若者に拍手をくりります。

今回の参加者のほとんどは、過去に「閑谷学校」、「備前焼」に触れる機会があったと思いますが、その内容を今回のように深掘りしたのはおそらく初めてではないかと思います。この素晴らしい文化遺産に十分な時間をもって触れることができたのは幸せなことでした。

八塔寺ふるさと村も素晴らしいです。美しい景観と人々の暖かなおもてなしの心を大いに感じることが出来ました。過疎化や高齢化の波は今後一層厳しいものがあるかと思いますが、皆さんのが知恵を絞り豊かな村づくりへ向かい頑張っていただくよう願っています。ありがとうございました。

平成30年7月12日 スタッフ：北川恵子、坪井都子、飯田正恒

以上